子どもの生活と学校教育に関する意識調査(2)

―― 中国と日本の子どもの「らしさ」意識と職業選択 ――

劉　郷　英

I　はじめに

『生活と教育』研究グループ[1]では，小学校における「生活科」の新設を契機として，1988年以来，日本と中国で，子どもの生活と学校教育に関する意識ないし気分といった現状の傾向を把握するための調査研究を続けてきた。岡野ほか（1992）は，1988年には，日本の京阪神地方在住の小学校5，6年生（合計1173人）に対して，「子どもの生活と学校教育」に関する意識調査を行ない，そして，1990年には，同じ調査項目に関して中国の上海[2]でも小学校5，6年生（合計992人）を対象に実施した結果を中日で比較検討した。そこでは，①生活や学校教育に対する中国の子どもたちの「肯定的・意欲的な評価傾向」，②日本の子どもたちの「あいまい化」傾向が確認された。

さらに，5年後の変化をみるために，同一内容に子どもの自己定義に関する項目を加えたアンケート調査を，1994年，日本の京阪神地方と中国の北京[3]で行った。その結果は，前回の調査と同一内容の項目においては，中国と日本とでは，それぞれ前回の結果と類似した傾向が確認された。

劉・皇（1996）は，1994年に実施した調査結果に基づいて，とりわけ生活と学校教育に対する中日両国の子どもたちが示した「傾向」の差の意味に関して考察を行なって，次のことを指摘している。中国の子どもにとっては，学校はあくまでも科学的な知識の教育，思想・道徳教育や生活態度・生活習慣の育成に関する教育を受ける場である。これに対して，日本の子どもにとっての学校は学習の場である一方，さらに人間関係を結ぶのに欠くことのできない場でもある。

しかしながら，日本の子どもたちは，対教師関係や生活習慣については「なんともいえない」とするあいまいな回答が多く，友人関係も満足度の割には稀薄である。岡野ほか（1992）は，この「あいまい化」傾向の意味に関して次のように指摘している。日本の子どもたちの学校生活はもはや「Yes，No という二値的な評価尺度では容易に測定し難い多面性」を備え，「グレー・ゾーン化」しているのである。

ところで，これまでの分析は主として生活と学校教育のあり方に向けられてきた。自己定義の準拠枠となる「らしさ」意識や自己の将来像たる「職業希望」においてはどのような傾向がみられるのであろうか。

本稿では，このような研究経緯と問題意識の下で，1994年の中国と日本での調査データをもとに，中国と日本の子どもたちの「子どもらしさ」・「女の子らしさ」についての意識や「将来観」・「やりたい仕事」の分布の意味するところを，「社会規範」「社会体制」「社会変化」などとの関係から把握・検討してみたい。

Ⅱ　調査内容

(1)　調査名称　「生活と教育についてのアンケート」

(2)　調査内容　〈日中共通項目〉「学校での気持ち」「先生への願い」
「生活態度」「生活習慣」
「マスメディア接触」「おこづかいの額」
「こどもらしさの認知」「女の子らしさの認知」
「気持ちの理解」「希望職業」

(3)　調査時期　〈日本〉1994年６月～９月　　〈中国〉1994年10月

(4)　調査方法　〈日中とも〉担任教師の監督による集合自記式質問紙調査

(5)　調査対象　〈日本〉大阪府，兵庫県，京都府，滋賀県の小学校８校に在学する小学４，５，６年生1116名。（但し，今回の分析では中国と揃えるために５，６年生1059名のみを対象とする。）
〈中国〉北京市内の小学５，６年生1504名

表１　分析対象者数内訳（1994年調査）＜表内数字は人数＞

日本（関西） 学年＼性別	男子	女子	計
５年生	２９５	２８４	５７９
６年生	２４８	２３２	４８０
計	５４３	５１６	1059

中国（北京） 年級＼性別	男子	女子	計
５年級	３６５	３６２	７２７
６年級	４１４	３６３	７７７
計	７７９	７２５	1504

本稿では，上述の調査内容における①「こどもらしさの認知」，②「女の子らしさの認知」，③「希望職業」の三項目について比較検討してみる。

Ⅲ　調査結果と考察

1．子どもの「らしさ」意識

1．－A「子どもらしさ」についての認知

日本の「おとな」が抱くステレオタイプイメージとしての「子どもらしさ」について，小学校の5，6年生がどのように認知しているかを知るために用意した質問項目は，次の9項目である。

①「しっかり勉強する」(努力学習)。②「テレビをあまりみない」(不太看電視)。③「お金をむだづかいしない」(不乱花銭)。④「人の言うことをすなおにきく」(虚心地聴取別人的話)。⑤「エッチな話をしない」(不説下流話)。⑥「自分の将来に夢をもつ」(対自己的未来抱有理想)。⑦「どんなことでも，コツコツがんばる」(做任何事情都能不懈地，頑強地努力)。⑧「お金をつかって，かけごと〈ギャンブル〉をしない」(不花銭賭博)。⑨「夜おそくまで，あそびまわらない」(晩上不游玩到很晩)。[(　) 内は中国語訳である。]

上述の9項目のそれぞれについて，「こどもらしい」「おとならしい」「どちらにもあてはまる」「どちらにもあてはまらない」の4カテゴリーに識別させた結果（%）を，日中比較で示したのが図1（松村ほか，1996より）である。

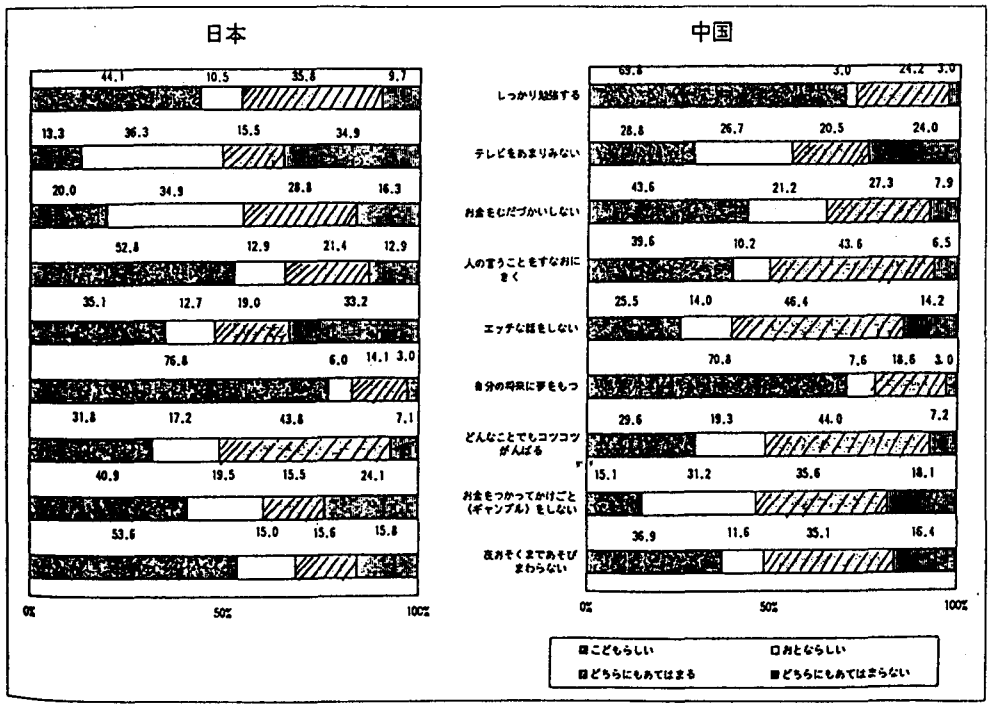


図1「こどもらしさ」の認知

(1) 中国の場合

明らかに「こどもらしい」とみているのは，「しっかり勉強する」(69.8%) と「自分の将来に夢をもつ」(70.8%) の二項目のみである。「お金をむだづかいしない」では，「こどもらしい」(43.6%) に「どちらにも適」(27.4%) と「おとならしい」(21.1%) が迫っている。「夜おそくまで，あそびまわらない」では，「こどもらしい」と「どちらにも適」が30%台で拮抗している。さらに，「人の言うことをすなおにきく」「エッチな話をしない」「どんなことでも，コツコツがんばる」の三項目では，「どちらにも適」に「こどもらしい」が迫っている。「お金をつかって，かけごと〈ギャンブル〉をしない」では，「どちらにも適」と「おとならしい」が30%台で拮抗している。「テレビをあまりみない」だけはそれぞれの判別が20%台で分かれている。

要するに，日本の基準での「子どもらしさ」に関する中国の子どもたちの反応の傾向としては，「こどもらしい」と「どちらにも適」という二選択肢の間で拮抗していることである。

以上の結果を見る限り，次のことが推測できる。先ず，中国（「大都市圏」）の子どもは，日本の「おとな」が抱くステレオタイプイメージとしての「子どもらしさ」を「社会規範」として受けとめていることが推測できる。ただし，「しっかり勉強する」，「自分の将来に夢をもつ」というような大人が入りにくい子ども特有の生活領域についての項目においては，すなおに「子ども規範」として受けとめている。これに対して，「お金をむだづかいしない」，「人の言うことをすなおにきく」，「エッチな話をしない」，「どんなことでも，コツコツがんばる」などの大人と共有している生活領域に関する項目においては，大人と子どもとの「共通の規範」として受けとめていると考えられる。この意味では，中国の子どもたちの意識においては日本の基準での「子ども規範」のボーダーがほぼ存在していないと言えよう。これは，大人も子どもも区別なく包摂する現代中国特有の社会体制を支えている教育方針や教育実践における目標などと深くかかわっていると考えられる。

(2) 日本の場合

松村ほか (1996) の分析によれば，「子どもらしさ」に関する日本の子どもたちの認知の傾向としては，「子どもらしい」と見ている項目の多さである。項目別に見ていくと，「しっかり勉強する」(44.1%)，「人の言うことをすなおにきく」(52.8%)，「自分の将来に夢をもつ」(76.8%)，「お金をつかって，かけごと〈ギャンブル〉をしない」(40.9%)，「夜おそくまで，あそびまわらない」(53.6%) の5項目である。一方「おとならしい」とする者が多いのは「お金をむだづかいしない」(34.9%) である。また「テレビをあまりみない」では「おとならしい」と「どちらにもあてはまらない」が，「エッチな話をしない」では「こどもらしい」と「どちらにもあてはまらない」が，それぞれ30%台で拮抗している。さらに「どんなことでも，コツコツがんばる」

は「どちらにもあてはまる」とみている者が多い。

松村ほか（1996）の考察によると，「子どもらしい」と見ている5項目の傾向は，日本の子ども自身のなかに「近代的子ども規範」はかなり維持されていることを示唆するものである。しかし，性的話題を提供するという面も含めた「現代的情報化」の側面に関しては大人と子どものボーダーを緩めてこれを受容しているのである。「近代的子ども規範」の維持と「現代的情報化」の受容という現象はあたかも「学校」と「メディア」の両方に志向している今日の日本の子どもの姿を物語っているかのようである。

「こどもらしさ」に関する中国と日本の子どもが認知している共通の規範としては，「自分の将来に夢をもつ」（中国：70.8%，日本：76.8%）である。しかし，両国の子どもの持っている夢はまたそれぞれ異なっているのである。これについては，後の「職業選択の傾向性」において検討を行なう。

1．－B「女の子らしさ」について

日本の「おとな」からみたステレオタイプイメージとしての「女の子らしさ」について，小学校の5，6年生がどのように認知しているかを知るために用意した質問項目は，次の8項目である。

①「やさしい」（温柔）。②「かわいい」（可愛）。③「おとなしい」（老実）。④「おしゃれ」（好打扮）。⑤「こまやか」（仔細）。⑥「せわずき」（好帮助人）。⑦「ぺったりなかよし」（好得分不開）。⑧「まじめ」（認真）。［（　）内は中国語訳である。］

この8項目については，「女の子らしい」「男の子らしい」「どちらにもあてはまる」「どちらにもあてはまらない」の4カテゴリーに識別させた結果を日中比較で示したのは図2（内外教育，1996より）である。

(1)　中国の場合

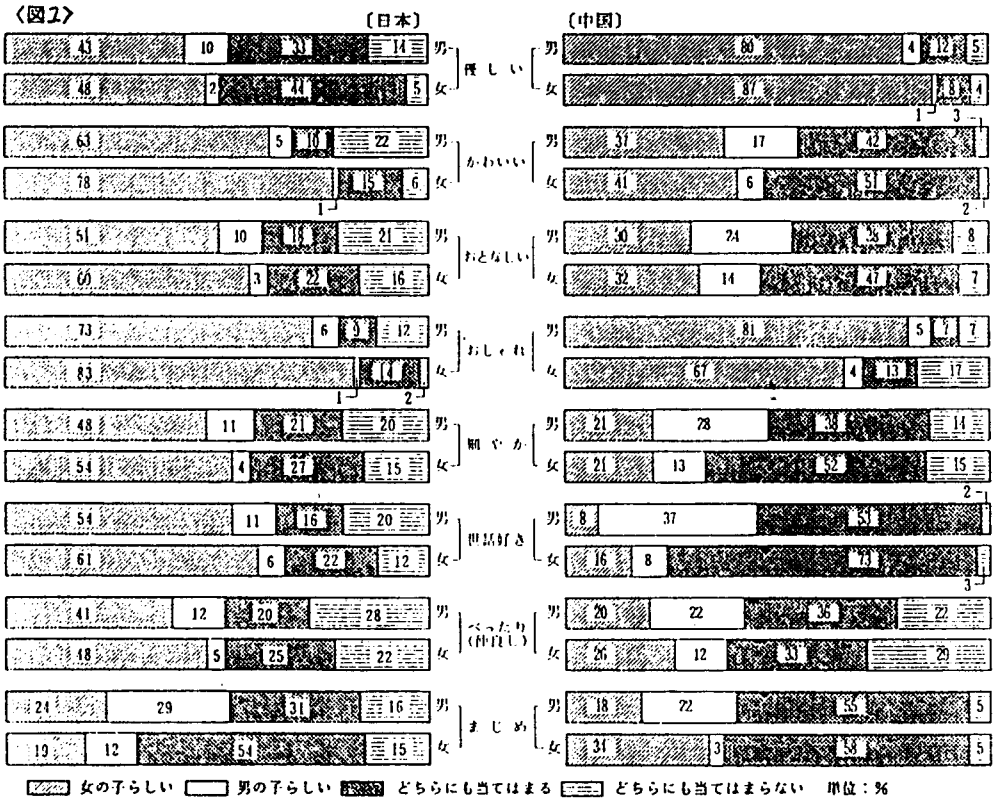
中国の子どもの反応の特徴としては，「女の子らしい」とみている者がかなり多いのは男女ともに「やさしい」（温柔）「おしゃれ」（可愛）の2項目のみである。それ以外の項目すべてを「どちらにもあてはまる」とする男女の多さに注目すべきである。しかもそれらのほとんどに第2位として男子は「男の子らしい」が，女子は「女の子らしい」がくる。

要するに，中国の子どもは「女の子らしさ」の認知においては，男女の「らしさの争奪」現象がみられた。このような反応は日本の子どものそれと大きく異なる。

上述の結果について，次のように推測できる。「やさしい」（温柔）と「おしゃれ」（好打扮）の中国語の語感（女子に対する専用語に近い）から，この2項目に関する判断は自然的で，生理

的な性差によるのではないかと考えられる。その他の項目に使用した言葉は，中国語においては性差は認められない。すなわち，「性差」が認められる項目については，中国の子どもは，男女とも「女の子らしさ」とみとめるが，「性差」が認められない項目については，男女の「らしさの争奪」現象がみられるわけである。このような現象は，現代中国社会の各領域において活性化している男女平等の原理 ── 「女性は政治，経済，文化，社会及び家庭における生活などの各方面において男性と平等の権利を有している。」（『中華人民共和国婦女権益保障法』総則第二条より。日本語訳は筆者） ── が子どもの意識における投影ではないかと考えられる。

〈図2〉



(2) 日本の場合

松村ほか（1996）の分析によると，「女の子らしさ」に関する日本の子どもの反応の傾向としては，「まじめ」を除くすべての項目でそれを「女の子らしい」とする者が男女ともに最多を占めていることである。そのようにみている者の%の多い順で並べると，その並びは男女で一致し，「おしゃれ」（男：73.1%，女：82.8%）「かわいい」（男：63.3%，女：77.6%）「せわずき」（男：53.9%，女：60.6%）「おとなしい」（男：51.4%，女：59.7%）「こまやか」（男：47.7%，女：53.8%）「やさしい」（男：43.4%，女：48.2%）「べったりなかよし」（男：40.9%，女：

48.2%）となる。さらにこの７項目すべてにおいて女子の方の％が高い。

松村ほか（1996）の考察では，日本の子どもたちは，「外見」に訴えかける態度・性向に肯定率が高いという側面を備え，伝統的な女性性を肯定しているのである。この点は消費社会における外的差異化傾向として理解できる。内に秘めた女らしさではなく，見た目の女らしさに価値を見出だしているのである。

一方，男子では「どちらにもあてはまらない」，女子では「どちらにもあてはまる」とする割合も高い。このことは，男子は否定的に，女子は肯定的に「ボーダーレス化」し始めていることを物語っている（松村ほか，1996）。

上述の検討によって，次のことを明らかにした。日本の基準での「女の子らしさ」に関しては，中国と日本の子どもが持っているイメージはそれぞれ異なっている。これは中国と日本の社会における男女の価値観の違いによるのではないかと考えられる。

2．職業選択の傾向性（自由記述より）

中日両国の子どもたちに「将来やりたい仕事」を自由記述により求めた。それぞれの職業選択の傾向性は次のとおりである。

(1) 中国の場合

全体的には，①記入しなかった中国の子どもは全体の20％を占め，女児より男児の方が多い，両者とも学年があがるに従って減少する傾向がみられた（男児：５年29.9％ → ６年20％，女児：５年17.4％ → ６年15.4％）。

②中国の子どもがあげた職業の種類は女児より男児の方が多い（男児：平均62種，女児：平均52種）。両者とも学年があがるに従って増加する傾向が見られた（男児：５年53種 → ６年71種，女児：５年46種 → ６年57種）。

上述の結果によって，「子どもらしさ」に関する中国の子どもの認知の結果からもわかったように，中国の子どもの世界と大人の世界とは境界がない。そのため，大人世界における職業分布の事実や職業評価の現実が年齢の増加にともなってより明らかにみえてきたからであろうと推測できる。

さらに，中国の子どもが挙げた職業の内容を仕事の種類で男女別学年別に上位15位までまとめてみると次のとおりである（表２）。

中国の子どもが挙げた職業の内容の特徴は以下に示すとおりである。

①上位３位まで見ると，男児は「科学者」「医師」「経営者」「軍人」など，女児は「先生」「医師」「俳優」「デザイナー」のように，知的で，エリート的で，地位の高い，経済的に恵まれてい

表2　：将来やりたい仕事（自由記述）　上位15(%)

順位	中国男児（仕事の種類数：平均62）		中国女児（仕事の種類数：平均52）	
	5年（53種）	6年（71種）	5年（46種）	6年（57種）
1位	科学者（11.7）	経営者（10.2）	先生（25.1）	先生（22.5）
2位	医師　（9.0）	科学者（7.8）	医師（23.4）	医師（18.9）
3位	軍人　（7.4）	運転手（6.9）	俳優　（5.7）	デザイナー(9.8)
4位	運転手（7.0）	先生（6.6）	音楽家（4.7）	俳優　（9.1）
5位	経営者（5.9）	スポーツ選手　（5.4）	画家　（4.3）	弁護士（7.2）
6位	先生（5.5）	軍人　（3.9）	デザイナー・歌手（3.3）	画家　（4.6）
7位	警察官（4.3）	警察官（3.6）	弁護士・翻訳者（3.0）	モデル（3.9）
8位	画家・パイロット（3.1）	医師　（3.3）	スチュアデス（2.3）	経営者（3.3）
9位	数学者・エンジニア・音楽家（2.3）	彫刻家（3.0）	科学者・スポーツ選手（2.0）	スチュアデス・スポーツ選手（2.9）
10位	スポーツ選手　（2.0）	エンジニア・パイロット（2.7）	生物学者・音楽家・司会（1.7）	翻訳者・ガイド（2.6）
11位	政治家・教授・天文学者・コンピューター設計・役に立つ仕事・よく働くする・会社社長・宇宙飛行士・労働者（1.6）	政治家（2.4）	ガイド・店員・マネージャー・モデル（1.3）	警察官・科学者・歌者（2.3）
12位	弁護士・発明家・デザイナー・探偵・俳優（1.2）	弁護士・俳優（2.1）	幼稚園教諭、保母・警察官・教授・天文学者・作家(1.0)	音楽家・歌手（1.6）
13位	動物学者・大学進学・翻訳者・歌手・騎士（0.8）	教授・数学者・サッカー選手・コック（1.8）	外交官・役に立つ仕事・知識人・大学進学・経営者・店を経営する・運転手・アナウンサー・アイドル（0.7）	政治家・作家・アイドル・理容、美容店（1.3）
14位	各種職業師・大将・外交官・国連の長・市長・宇宙専門家・物理学者・英雄・歌手・作家・工芸家・画家・店を経営する・コレクター・郵便配達・サッカー選手・武道家・芸能人・レストラン経営・家業を継ぐ・コック（0.4）	労働者　（1.5）	消防士・政治家・公務員・研究者・物理学者・歌手・歯医学院入学・文学者・芸術家・宇宙飛行士・弁論家・歌者・食料品店（0.3）	大学進学・芸術家・会社社長・マネージャー（1.0）
15位		大学進学・会社社長・武道家・歌手（1.2）		軍人・教授・コンピューター設計・運転手・バレー（0.7）

表3 男女ともにあげる仕事の種類

日本	中国
1.医師	1.先生
2.漫画家	2.医師
3.芸能人	3.科学者
4.先生	4.企業家
5.警察官	5.俳優
6.サラリーマン	6.画家
7.スポーツ選手	7.デザイナー
8.役にたつ仕事	8.運転手
	9.弁護士
	10軍人
	11スポーツ選手　12警察官　13音楽家　14翻訳者　15歌手　16政治家　17教授（博士）　18会社社長　19大学進学　20留学　21外交官

る，安定したものが多い。

②男児は「分散化傾向」（上位2位までの合計数値は：19%）。女児は「集中化傾向」（上位2位までの合計数値は：45%を示している）。両者とも学年があがるに従ってやや「分散化傾向」を示している（男児：5年：20.7% → 6年：18%，女児：5年：48.5%，6年：41.4%）。

③職業を記述する言葉が日本と違う。「科学家」「数学家」「動物学家」「発明家」（表の記述は日本語の訳語である）などの「……家」の表現が多い。ここからも，中国の子どもたちは現実より大きな夢をもっていることがうかがえる。

④「男の職業」，「女の職業」とみる区別はほとんどない。

⑤男女共有の職業の種類は多い（中国：職業種類の平均数：57の内，44種が共有している。日

本：平均種類数：54の内，29種が共有している)。(表３)

以上の結果から，中国の子どもは自分の将来に自分自身の現実より大きな夢を持っていると言える。ただし，この夢は現代中国の「改革開放政策」に刺激された中国独特の「四つの現代化」の実現に変動しつつある中国の現実社会が子どもたちに求めているもののようである。

(2) 日本の場合

全体的には，①記入しなかった日本の子どもは全体の30%以上を占め，女児より男児の方が多い，男女とも学年があがるに従って増加する傾向がみられた（男児：５年41.6% → ６年42.7%，女児：５年30.9% → ６年38.5%)。

②日本の子どもがあげた職業の種類は女児より男児の方が多い（男児：平均59種，女児：平均50種)。両者とも学年があがるに従って減少する傾向が見られた（男児：５年64種 → ６年53種，女児：５年56種 → ６年43種)。

表４　：将来やりたい仕事（自由記述）　上位15(%)

順位	日本男児(仕事の種類数：平均(59)		日本女児(仕事の種類数：平均(50)	
	５年（64）	６年（53）	５年（56）	６年（43）
１位	野球選手(15.5)	野球選手（8.5）	幼稚園教諭、保母(14.3)	幼稚園教諭、保母(12.5)
２位	サッカー選手（15.0）	サッカー選手・芸能人・家業を継ぐ（6.3）	漫画家（7.6）	医師・看護婦（6.3）
３位	サラリーマン（5.9）	医師（4.9）	先生（7.2）	音楽家（5.6）
４位	医師・家業を継ぐ（3.7）	漫画家（4.2）	スチュアデス（6.3）	先生・作家・漫画家・ケーキ屋（4.9）
５位	警察官（3.2）	警察官・コンピューター設計・スポーツ選手（3.5）	医師・ケーキ屋（5.8）	スチュアデス・調教、飼育、トリマー・芸能人（4.2）
６位	コンピューター設計・大工（2.7）	歯科医師・役にたつ仕事・サラリーマン（2.8）	花屋（5.4）	薬剤師・バレー・料理をつくる（2.8）
７位	研究者・電車運転手・芸能人（2.1）	弁護士・大金持ち・会社社長・パイロット（2.1）	音楽家・芸能人（4.5）	警察官・政治家・画家・デザイナー・アナウンサー・俳優・声優・理容、美容店（2.1）
８位	建築家・漫画家・宇宙飛行士・パイロット・バスケット選手・寿司屋・漁業（1.6）	獣医・科学者・運転手・おかまバー・家具店・農業（1.4）	看護婦・調教、飼育、トリマー・（4.0）	ベビーシッター・外交官・建築家・ガイド・通訳・サラリーマン(oL)・主婦・スポーツ選手・ペットショップ（1.4）
９位	先生・科学者・天文学者・発明家・車製造家・有名人・画家・大金持ち・運転手・船長、船員・店員・アメフト選手・相撲・コーチ・声優・車屋・電気屋・農業（1.1）	先生・軍人・政治家・歌理士・公務員・教授・研究者・天文学者・車製造家・知識人・店を経営する・宇宙飛行士・アナウンサー・通訳・郵便配達・労働者・店員・アメフト選手・相撲・水泳・レーサー・登山家・コーチ・ゴルファー・ラーメン屋・蕎きそば屋・車屋・材木店・大工・商人・コック（0.7）	獣医・デザイナー（3.6）	歯科医師・消防士・弁護士・役にたつ仕事・宇宙飛行士・スケートのペア・蕎きそば屋・小物屋・花屋・洋服屋・メイク・掃除（0.7）
10位	薬剤師・獣医・消防士・弁護士・教授・エンジニア・飛行機製造家・新幹線製造家・役にたつ仕事・大学進学・作家・アニメ作家・会社社長・アナウンサー・俳優・労働者・スポーツ選手・水泳・キックボクサー・レーサー・俳優・食料品店・ケーキ屋・ペットショップ・理容、美容店・商人・運転・コック（0.5）		画家・ペットショップ（3.1）	
11位			俳優(2.7)(以下省略)	

上述の学年があがるに従ってみられた日本の子どもの職業選択の傾向はちょうど中国の子どものそれと反対しているのである。この傾向について，松本（1996）は「厳しい現実社会と，あいまいで不透明な大人の世界の両方に引きずられ，子どもは自分の未来を規定できなくなっている」と指摘している（1996年９月19日付　京都新聞より引用)。

さらに，日本の子どもが挙げた職業の内容を仕事の種類で男女別学年別に上位11位までまとめてみると次

のとおりである（表4）。

松本ほか（1996）の分析に従えば，日本の子どもが挙げた職業の内容の特徴は以下に示したとおりである。

①「男の職業」,「女の職業」とみる区別はあきらかである。「男の職業」とみる「家業をつぐ」「コンピュータソフトや設計」「芸能人〈タレント〉」は学年があがるに従って増加傾向が，逆に「スポーツ選手」「サラリーマン」「大工 」「運転手」「研究者」は減少傾向がみられる。「女の職業」とみる「音楽家」「看護婦」「作家」は学年があがるに従って増加傾向が，逆に「幼稚園教諭，保母」「先生」「スチュアデス」「ケーキ屋さん」「花屋さん」は減少傾向がみられる。

②男女共有の職業の種類は少ない。上位の選択をみると，男女共有の職業は「医師」（学年があがるに従って増加）と「漫画家」（学年があがるに従って男児は増加傾向が，女児は減少傾向）である。

上述の結果は，日本の子どもが自分の将来をより現実的に描いていることを示唆すると考えられる。

Ⅳ　まとめ

以上，1994年に実施した「子どもの生活と教育」に関する調査結果に基づいて，中国と日本の子どもの「らしさ」意識と職業選択の傾向性について比較検討を行った。

日本の伝統的な「らしさ」基準で測定した中国の子どもたちの「らしさ」意識においては，日本の基準による「大人」と「子ども」との境界及び「男」と「女」との境界が存在していない。彼らはこのような「ノンボーダー」意識によって，自分の将来の夢を描いている。したがって，将来の夢となる職業選択においても，「大人世界のリアリティ」と「子ども世界の現実」との境界及び「男の職業」と「女の職業」との境界はみられない。

一方，日本の子どもたちは「らしさ」に関する意識は，大人の常識に沿った建前の部分と本音部分のグレーゾーンとの二重構造になっている。森によれば，彼らは「大人にみせる部分を意識しながら，独自の世界をつくって自由に出入りしている」（1996年9月19日付　京都新聞より引用）ようである。彼らは「自分の将来に夢を持つ」ことが「こどもらしい」とは認めているが，しかしまた「厳しい現実社会と，あいまいで不透明な大人の世界」（松本，1996年9月19日付京都新聞より引用）に直面して自分の将来の夢をうまく語れないのである。

中国と日本における子どもたちのこういう意識の形成においては，それぞれの国の社会体制や，学校教育，日常生活など子どもを囲む周囲の環境が大きな役割を果たしていると考えられる。

注

(1) 1988年の一回目の共同研究者：岡野純，小西達郎，皇紀夫，松村将，松本勝弥，森繁男
1994年の二回目の共同研究者：皇紀夫，松村将，松本勝弥，森繁男，劉郷英

(2) 1990年に中国での調査研究は，中華人民共和国上海市の華東師範大学の協力を得た。

(3) 1994年に中国での調査研究は，中華人民共和国北京市の北京師範大学の協力を得た。

引用文献

① 岡野純・皇紀夫・松本勝弥　1992　生活と教育に関する調査研究 ── 日中の比較から ── 京都女子大学教育学科紀要第32号　p.54－92

② 劉郷英・皇紀夫　1996　子どもの生活と学校教育に関する意識調査 ── 中日比較において ── 関西教育学会紀要第20号 p.101－105

③ 松村将・松本勝弥・森繁男　1996　生活と教育に関する調査研究(4)　京都女子大学教育学科紀要第36号　p.34－65

④ 松本勝弥・森繁男・劉郷英　1996　子どもの「らしさ」意識と職業希望 ── 日本と中国での調査より ── 日本教育学会第55回大会自由研究発表要旨集録　p.162－163

⑤ 中華人民共和国婦女権益保障法（1992年発布）　1994　法律出版社

⑥ 日中で変容する「女の子」のイメージ　1996　内外教育

⑦ 将来の夢語れぬ子供たち　1996　京都新聞（９月19日）

（博士後期課程）